
B L A D E 三匹の小人間は竜に勝るか？

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLADE 三匹の小人間は竜に勝るか？

【Nコード】

N5865I

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

興味持った人は【BLADE 連載版】読んでくださいな。ええ、読まないときっぱりわからないのでm(´▽｀)m

(前書き)

ワイバーン 巨大な竜、神獣と呼ばれる特殊な生物の一体

震術 魔法のこと、震力と呼ばれる力を使い大気を急激に摩擦して
て炎や雷撃を生み出す

「間近で見ると流石にでっかいサ……！」

シーク・ツェイベルは苦い笑みを浮かべたがそれでもどこか楽しげだった。

「単独行動禁止ね 攻撃よりサポートと連携優先 派手な一撃は要らないから、地道に削っていきましょ ドラ エの魔王との戦い方ね」

「りょーかい」

「ミス単独行動が何言ってるサ……」

呆れたように言い、待機状態の“それ”を盾と剣に変えた。ワイバーンの頭が空を向いて鈍い光を放つ。

「ドラゴンブレスの予備動作……?!」

「違う、ただの火炎震術サ 備えろ！」

飛翔したワイバーンが眼下に向けてそれを放った。

「げっ」

王国最強の名を継いだ震術師、リースはその異様に思わず呻いた。例えば“神へ還す火”という名を持つ震術がある。鉄をも溶かす超

高温の青い炎を放つ火炎系の極大術の1つだがおそらくはそれクラスの威力を保ったまま、

炎の空が、墜ちてきた。

「屈折率……「お前は何もしなくていいサ」

“光”を放とうとしたリースをシークが制す。

「カイゼル」

「うん」

パキパキパキ 何かにヒビが行くような軽い音が聴こえた。

「絶対零度（セルシウス）」

カイゼル・グランローグの放った摂氏-273度の圧倒的な冷気を受けて炎が空気ごと凍りついた。シークが三人の周りに薄い空気の壁を作り冷気の侵入を阻む。

「……デタラメね」

「ああ、向こうもな」

ワイバーンは一度羽ばたいた。烈風が巻き起こるがもちろんその程度で-273度の氷の世界は揺るがない。だからワイバーンは、烈風と自身の放つ温度を盾にして“空気の氷”に体当たりした。

ガリガリガリイッ！！

巨体が三人の元に突撃してきた。

「さっすが神獣……！」

- 273度なんてとんでもない冷気で固められた氷塊は当然固い。それをワイバーンはガリガリと生身で食い千切って迫る。

(『絶対零度』が足止めにもならないか)

「カイゼル、絶対零度を解け リース、周りの氷を溶かせるか？」

「りょーかい」「余裕」

冷気の核が消え気温が急激に氷の世界を壊して行く。それを『垣間見る地獄の業火』が助長した。周囲一体にばら蒔かれた炎が消し飛ばし、消え損なった液体空気の雨をシークの“風”が吹き飛ばす。だが、炎と風のどちらでもワイバーンは止まらない。

「どうも体当たりする気らしいサ」

「どっぴするっ？」

「当初の予定とは外れるけど……、散るサ！」

三人が同時に動き、三秒前まで彼らが居た場所にワイバーンの巨体が突き刺さった。

シークは左へ、カイゼルは上空へ、リースは右へ。

「ッ……！！」

シークとリースは衝突の余波で盛大に吹き飛んだ。

ワイバーンの首が余波を受けて体勢を保てないリースを向く。

火炎系の震術！ 一瞬で察知したリースが“光”を集める。

集めた光を放つまでもなく炎の震術はリースから遙か遠くに逸れて行った。斜め上から巨大な剣がワイバーンの首をぶち抜いたからだ。

カイゼルの振るった10m強ある氷塊の剣だ。

（切断出来ない……！）

打ってから“しまった、契約しにきた神獣を殺っちゃった”とすら思ったカイゼルはその強度に驚愕した。

ワイバーンは動きを止めずに翼をリースに向かわせる。

（無視っ！）

リースは詠唱する。属性は雷。一点収束型の極大震術、『神の投げた槍』

無数の魔方陣を一挙に展開し小さな雷撃を組み合わせ加速させ、収束させて、一本の槍を作り上げる。

リースが術式を組み終わるよりも遙かに速くワイバーンの翼が彼女に向かう。

リースはそれに対してまったく無防備だった。なぜなら、

彼女はシーク・ツェイベルをそれなりに信頼していたからだ。

「偉大なる剣っ！」

無数の顔を持つ機械剣、《機械仕掛けの神（デウス・エクスマキナ）》がその中でも最大級の威力を持つ大剣の形態を取る。そしてそれが翡翠色の光を放った。シークは大きく跳躍しその速度のままにそれを振るった。

翼と剣のあいだで全てが弾け飛ぶ。シーク自身も、そしてワイバーンの翼もだ。シークは舌打ちする。頑丈すぎる。翼を弾き飛ばすことにこそ成功したが、ワイバーンには傷1つつかなかった。シークはワイバーンの翼を切断するつもりだったというのに。

だが、

「神の投げた槍」

シークは異様を目撃し、自身が役目を忠実に果たしたことを理解した。

リースの手に握られているのは 正確には手から数cm離れたところに浮かんでいる 六本の円形魔方陣の巻き付いた、彼女の身長の数倍はある長い電流の矛槍だ。そこから更に棒状の部分に無数の魔方陣が絡み付き装飾のように槍を彩っている。

「 いったっ」

槍投げのように助走をつけて、リースはそれを放った。

巻き付いた六本の魔方陣が後方から順に磁力的な反発力を生み槍を加速させ、

「けえええっつ！」

超速度を得た槍がワイバーンを貫いた。

バチバチバチイツツ！

轟音を鳴らして超高圧の電流がワイバーンの体内を駆け巡る。悲鳴は上がらなかった。ただ翼をなにかに抗うように少しだけ持ち上げて、ズウウンっ　とワイバーンの体が土煙を上げて地面に沈んだ。

「…………ふう」

なんてことのない一仕事終えたあとのようにリースは息を吐き、吸う。

「…………派手な一撃はいらなかったのはどこの誰サ？」

崩れ落ちたワイバーンを横目に見てシークが悪態をついた。

(後書き)

ほんとは活動報告に書こうと思ったが文字数的に無理だった。続き書くかは微妙。バトル物書きたかったから書いただけだから(蹴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5865i/>

BLADE 三匹の小人間は竜に勝るか？

2010年10月21日23時51分発行